

3 環境情報の収集・発信

センターは、県民に環境意識の向上や環境保全活動を支援するため、ホームページで様々な情報を公開している。ホームページでは、環境学習情報のほか、試験研究情報、国際貢献情報等を提供している。センターでは、ホームページを情報発信の重要なツールの一つとして捉え、より効果的に情報発信を行うための整備を行っている。

ホームページアドレス <http://www.pref.saitama.lg.jp/soshiki/fl6/>

〔平成22年度アクセス件数 83,355件 前年度比 37%増〕

また、本年度も新聞による環境情報の発信や、センターの活動を広く知ってもらうためにニュースレターを発行した。

3.1 ホームページのコンテンツ

(1) 新着情報

トップページに、県民向けとしてイベントや各種講座、英語版ホームページ等について案内。

(2) 展示館と各種講座及び研究所からのお知らせ

募集、公開講座参加のお礼、展示館休館日、ニュースレター、ココが知りたい埼玉の環境、統計・調査資料等掲載。

(3) センターの概要

総長あいさつ、組織概要、沿革、全景図(航空写真)を掲載。

(4) 利用案内

所在地、電話番号、休館日、入場料、交通、研修室の利用、講座情報、研究所公開等について掲載。

(5) 施設紹介

全景図(航空写真)の掲載ほか、展示館、環境情報プラザ、生態園を施設毎に紹介。

(6) 学習・情報

環境大学、県民実験教室、生態園体験教室などの講座情報ほか、出前講座、生態園だよりについて掲載。

(7) 研究所

試験研究の取組、国際貢献について掲載。また、併せて刊行物をPDFにより提供する「刊行物データベース」を掲載。

(8) 環境関連リンク(センター内)

里川再生クリニック、二酸化炭素濃度速報値、光化学スモッグによるアサガオ被害調査、生物多様性データベース等。

(9) 環境関連リンク(センター外)

光化学スモッグ注意報等発令状況(大気汚染常時監視システム)、埼玉県自然学習センターほか。

3.2 ニュースレターの発行

センターが行っている試験研究の内容や様々な講座、イベントなどの情報を県民の方々に広く情報提供するため、ニュースレター(A4版、4ページ)を、平成22年度は4回発行した。なお、ニュースレターは、センターのホームページからも閲覧及びダウンロードすることができる。

(1) 第7号(平成22年5月発行)

- ・平成21年度埼玉県環境科学国際センター講演会
- ・新たな試験研究体制の紹介
- ・研究・事例紹介 「里川再生テクノロジー事業の概要―「川の国埼玉」の実現に向けて」
- ・環境学習・イベント情報

(2) 第8号(平成22年7月発行)

- ・環境科学国際センター開設10周年を振り返って
- ・グループにおける研究活動の歩み ・環境学習・イベント情報

(3) 第9号(平成22年10月発行)

- ・中国吉林省における国際環境技術セミナーについて
- ・研究・事例紹介 「コミュニティバス導入に関する自治体の選好分析と次世代自動車の普及率推計―県内自治体を対象として―」 「二酸化炭素濃度の速報値の公開について」 ・環境学習・イベント情報

(4) 第10号(平成23年1月発行)

- ・生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)とその概要
- ・「みどりと川の再生 埼玉フォーラムin嵐山」に“里川づくり出前実験室”を出展
- ・ココが知りたい埼玉の環境(1)―水質調査では何を調べているの? ・環境学習・イベント情報

3.3 新聞による情報発信

県の環境の現状やセンターの活動状況を多くの県民に理解してもらうことを目的に、センターの研究員が日頃の研究成果を活かして分かりやすく紹介する「環境シリーズ 埼玉の環境は今」を、平成19年度に埼玉新聞で掲載した(全39回)。

平成20年度は、この第2弾として「自然との共生 埼玉の現状と課題」(地球温暖化・みどりの再生・川の再生)を掲載した(全21回)。

さらに、平成21年度は、これらの第3弾として「持続可能な社会を目指して(低炭素社会、循環型社会、自然共生型社会)」を掲載している(平成21年12月～平成22年6月、全23回中今年度14回)。

平成22年度は、第4弾として前年度に引き続き「持続可能な社会を目指して(低炭素社会、循環型社会、自然共生型社会)」を掲載した(平成21年12月～平成22年6月、全23回中今年度9回)。テーマは下表のとおりである。

掲載日	テ ー マ 名	執 筆 者
4月 5日(月)	河川浄化への活用探る	土壌・地下水・地盤担当 石山 高
4月19日(月)	地中熱の有効利用を	大 気 環 境 担 当 佐坂公規
4月26日(月)	必要以上の使用避ける	化 学 物 質 担 当 細野繁雄
5月 3日(月)	化学物質の情報共有	化 学 物 質 担 当 茂木 守
5月10日(月)	環境にやさしい修復	自 然 環 境 担 当 王 効挙
5月17日(月)	有効資源になるリン	水 環 境 担 当 見島伊織
5月24日(月)	淡水の森の再生を	水 環 境 担 当 田中仁志
5月31日(月)	自前の水源を持つ	水 環 境 担 当 池田和弘
6月14日(月)	創エネ、省エネで削減	水 環 境 担 当 柿本貴志

なお、これらの原稿は環境科学国際センターのホームページで閲覧することができる。

3.4 センター講演会

当センターでは、広く県民に活動内容及び研究成果を紹介することにより、県民のセンターに対する理解と環境問題への関心を深めることを目的として「平成22年度環境科学国際センター講演会」を平成23年1月31日に埼玉会館(さいたま市浦和区)で開催した。横浜国立大学の松田教授による特別講演を行うとともに、センター研究員による研究成果・事例の発表、パネルディスカッション及び研究活動紹介のポスター展示と解説を行い、環境問題への理解を深める機会とした。センター講演会の参加者は201名であった。

(1) 特別講演

環境汚染対策と生物多様性条約 …………… 横浜国立大学大学院 環境情報研究院 教授 松田裕之

生物多様性を損なう要因は、生息地改変、乱獲、外来種、環境汚染、気候変動の5つといわれている。このうち環境汚染については、公害問題が深刻だった時代から対策の必要性が認識され対策が進んだ。生物多様性条約は、1992年に採択され、昨秋名古屋で締約国会議(COP10)が開催された。生物多様性条約の3原則は、生物多様性の保全、その構成要素の持続可能な利用、遺伝資源を利用する利益の公正な配分である。環境汚染と他の人為影響との比較を通じて生物多様性条約の取組みや日本の生物多様性をどう守るかについて講演が行われた。

(2) センターの研究成果・事例紹介

新たな大気環境基準PM_{2.5} …………… 大気環境担当 長谷川就一

浮遊粒子状物質(SPM)と呼ばれる粒径10 μ m(1mmの100分の1)以下の粒子の大気環境基準があるが、それ以下の粒子の環境基準はなかった。しかし、より小さい粒子は人体の肺深部まで侵入し、呼吸器や循環器へ影響することが示唆されたことから、アメリカ(1997年)やEU(2008年)では、粒径2.5 μ m以下の粒子(PM_{2.5}と呼ぶ)の環境基準が設定された。また、世界保健機関(WHO)は2006年にPM_{2.5}に関するガイドラインを設定した。日本では、2009年9月にPM_{2.5}の環境基準が設定された。本発表では、PM_{2.5}の概要や特徴、これまでの調査・研究と埼玉県における実態、今後の課題などについて紹介した。

ダイオキシンの由来を探る …………… 化学物質担当 蓑毛康太郎

ダイオキシン類は強毒性の環境汚染物質であり、ゴミを燃やす過程で生成されることから1990年代後半には大きな社会問題となったが、法の整備や行政・産業・市民が一体となった取り組みが功を奏し、ダイオキシン類の排出量は大幅に削減された。しかしながら、ダイオキシン類は難分解性であることから長期間環境中に残留し、いまだに環境基準を超過するような高濃度のダイオキシン類が検出される例もしばしば報告されている。そのためダイオキシン類の汚染の由来を知ることは、原因の究明や汚染物の除去といった対策を決定するのにきわめて有用である。本発表では、センターが開発した、ダイオキシン類の汚染由来を推定する方法と、その応用例を紹介した。

本県の地震環境と当センターにおける地震防災への取り組み …………… 土壌・地下水・地盤担当 白石英孝

県では地震被害想定調査と呼ばれる調査で具体的な被害を想定し、その結果を被害の軽減に向けた施策立案に役立てている。センターでは、こうした県の取り組みの一環として、地震時の揺れ方と密接に関連する地盤情報の整備に努めるとともに、地下3,000メートルに及ぶ大深度の地下構造を明らかにするための探査法の実用化と調査、さらには新たな技術開発などを進めてきた。本発表では、埼玉県をとりまく地震環境の概要及びこれまでにセンターが進めてきた地震防災に関連する調査・研究の成果について報告した。

(3) センターの活動紹介

各担当がその活動概要を紹介するポスターを展示し、参加者に説明するとともに、質問に答えた。



特別講演



ポスター展示

3.5 環境情報の提供

(1) モニタリングデータの提供 (CO₂)

環境科学国際センターは、さいたま市(1991～2000年度)、堂平山(1992年度～)及び当センター(2000年度～)において、地球温暖化原因物質である大気中のCO₂の濃度を観測してきた。測定に当たっては、世界気象機関標準ガスを基準としており、観測データについては、温室効果ガス世界資料センター(WDCGG)へ提供することにより、国連世界気象観測機構(WMO)の観測網を通して世界各地に供給した。平成21年10月からは、当センターの観測結果(速報値)をセンターホームページに掲載(自動更新)し、公開している。さらに、12月1日より、県庁第二庁舎ロビー及びパスポートセンターに設置した大型ディスプレイにおいて、CO₂濃度速報値ならびに温暖化関連情報の提供を開始した。

(2) 環境情報の海外への発信

2月28日より英語版ホームページを開設し、当センターの取組の海外に向けた情報発信を開始した。また、中文版パンフレットを新たに作成し、ホームページ上で公開を開始した。

3.6 マスコミ報道

センターの試験研究、環境学習等に関して、記者発表を行ったほか、取材を受ける等の結果、以下のとおりマスコミによる報道があった。

(1) 新聞報道、広報誌掲載

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内 容
4月10日 (土)	埼玉新聞	体験型展示が人気 温暖化テーマに一新	県環境科学国際センターの展示館がリニューアルされた。近年の重要課題である地球温暖化対策に特化。宇宙を飛行したコバトンのぬいぐるみなど展示内容を更新し、体験型のコーナーも充実させた。
5月 7日 (金)	読売新聞	「開館11年50万人達成」	県環境科学国際センター展示館で5日、来館者が開館11年目で50万人に達した。50万人目の来館者に花束とコバトンのぬいぐるみなどが贈られた。
5月10日 (月)	埼玉新聞	元荒川にアユが来た 「東京湾から遡上、さらに上流へ」	元荒川のアユがどこへ行くのか。現地調査で突き止めた県環境科学国際センター自然環境担当部長金澤光氏は元荒川を遡上したアユは、末田須賀堰を越えて、一気に鴻巣へ上り、安養寺堰を越えれば、北鴻巣で忍川と元荒川へ遡上する。忍川から熊谷市内の星川へと遡上しているとコメント。
5月25日 (火)	朝日新聞	荒川上るアユ増加 「今春に79万尾」	水資源開発機構によると荒川の秋ヶ瀬取水堰魚道を遡上するアユは79万尾に達するという。遡上量が多くなった要因について、県環境科学国際センター金澤光自然環境担当部長は、荒川以外の河川にもアユの遡上を確認している。また、産卵場は荒川よりも、河口から30km上流にある新河岸川、黒目川、柳瀬川など川を住民がきれいにすることで、産卵してアユ資源の増加にも寄与できるとコメント。
6月19日 (土)	埼玉新聞	清流にすむ生物って何？ 「本庄・藤田小と早大が 小山川など調査」	調査は国交省の「清流をとりもどそう小山川・元小山川ルネッサンスⅡ事業」の一つで、2005年から毎年実施。学生の他に市、県、NPOが参画している。本庄市立藤田小の5、6年生が胴長靴をつけて川に入り、生息魚類調査を行った。県環境科学国際センターの魚の専門家金澤光氏は、捕獲した生息魚をとおして、きれいな川と汚い川の違いを学んでもらい、どうすれば元小山川をきれいにできるか提案しているとコメント。

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内 容
8月 2日 (月)	埼玉新聞	荒川流域ネット体験シンポ	「地球温暖化の影響と対策」をテーマとしたシンポジウムと地曳網漁の体験交流会が嵐山町の国立女性会館などで開催される。県環境科学国際センター温暖化対策担当主任の増富祐司氏が「地球温暖化の影響と対策」をテーマに講演。同センター自然環境担当金澤光氏の指導で地曳き網漁の体験会を開催した。
8月 3日 (火)	埼玉新聞	荒川流域ネット「体験とシンポ」	「地球温暖化の影響と対策」をテーマにしたシンポジウムと地曳網漁の体験交流を行う「2010荒川流域ミズガキ交流会と流域再生シンポジウム:主催NPO法人荒川流域ネットワーク」が嵐山町国立女性教育会館などで開催。都幾川では県環境科学国際センター自然環境担当金澤光氏の指導で地曳網を参加者全員で体験するほか、情報交換会を開く。国立女性教育会館では同センター温暖化対策担当主任増富祐司氏が「地球温暖化の影響と対策」をテーマに講演。その後検討会を開いた。
8月21日 (土)	埼玉新聞	「ムサシトミヨ」でスクラム 埼玉大生と市民団体 保護活動です講演会	深谷市の埼玉工業大学の学生たちが県の魚のムサシトミヨの繁殖に取り組んでいる。22日に同大学で開かれる生物多様性をテーマにした公開講演会で、県環境科学国際センター、熊谷市ムサシトミヨをまもる会の市民団体と一緒に活動報告を行った。
9月16日 (木)	埼玉新聞	リレーエッセー比企・里山探訪「天然アユの復活を夢見て」 NPO法人荒川流域ネットワーク理事 千葉茂樹	比企には都幾川、槻川、越辺川などの清流が流れている。かつて、これらの川では川祭りが行われ、アユはその主役でもあった。魚類専門家の県環境科学国際センター金澤光氏によると「わずか50年前まで、荒川流域でアユ漁が盛んに行われており、明治42年、嵐山町の都幾川で50貫のアユが捕れた記録がある」とコメント。
10月19日 (火)	埼玉新聞	県職員定時退庁を調査 電力消費の2割削減	県庁職員が残業せずに一斉定時退庁すると、平日の勤務時間外平均と比べ19.6%電力消費量削減効果が得られることが分かった。
10月31日 (日)	埼玉新聞	希少種ムサシトミヨ 「県の魚」保護に壁	世界で熊谷市でのみ生息が確認されている希少魚、ムサシトミヨの保護が難問に直面している。生息地に生活排水が流入しないように公共下水道整備を求め、市民団体が市機会に出した請願は不採択。その一方で、市が流域で進めている合併浄化槽の普及もいまひとつだ。生物多様性条約締約国会議が30日未明まで名古屋で開かれ、希少生物の保護に関心が集まる中、「県の魚」の厳しい現実に関係者は危機感を強めている。県環境科学国際センターの金澤光氏によると生息数は半減しており、近親交配の危険性もあり、ムサシトミヨを50年前に絶滅したミナミトミヨにはならないとコメント。

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内 容
11月13日 (土)	埼玉新聞	シマドジョウが清流の証し 本庄・藤田小と早大が魚類調査	本庄市立藤田小と早稲田大学大学院による魚類・水質調査が藤田小近くの小山川と元小山川で行われた。調査結果から県環境科学国際センターの魚の専門家金澤光さんは「元小山川にはメダカに似た特定外来生物のカダヤシがいた。在来メダカが少なくなってしまうため、駆除が必要」、元小山川は御陣場川の水が入っていて、水質も徐々によくなりつつあり、「元小山川でアブラハヤとジュズカケハゼが見つかったのは朗報」とコメント。
11月27日 (土)	朝日新聞	さいたま沿線版 武蔵野 いまむかし・第5話 新座の野火止用水 ホタル飛ぶ清流もう一度	10月下旬、新座市の名利・平林寺の西を流れる野火止用水で市環境保全協力員の会が生き物調査を行った。櫻博子会長らがデータを記録した後、再び放流した。調査に付き添った県環境科学国際センターの金澤光・自然環境担当部長はヌマムツなど県外の「国内外来種」が繁殖中とし、「それだけのえさも生息する空間がある。県内在来種を移植すれば、増える可能性がある」と生態系の改善に注目する。金澤氏は、多摩川の水と生物を野火止用水に入れるのを「理想」とする一方、水路改善の必要性を指摘。ホタルのためには「土の法面」を造るべきだし、「今は魚の隠れ場が少ない。部分的でも川幅を広げることなどで、魚のすみかをつくると良い」と提案。
2月 2日 (水)	朝日新聞	ムサシトミヨ生息数調査 開始	県の魚で、熊谷市の元荒川の一部に生息する淡水魚ムサシトミヨの生息調査が始まった。5年に1度の調査で3日まで捕獲調査する。市によると、前回調査では約15,700匹と推定され、前々回の推定33,500尾から半減した。県環境科学国際センターの金澤光さんは「下水道の整備や合併浄化槽の普及が進んでいないため、増える要素は少なく、心配している」とコメント。
2月 7日 (月)	埼玉新聞	熊谷のムサシトミヨ 5年に1度の調査 保全推進協議会	ムサシトミヨ保全推進協議会は1日から3日、熊谷市の元荒川上流域で、県の魚のムサシトミヨの生息数調査を行った。生息域の環境整備など参考とするため、5年に1度実施している。2006年の調査では15,757匹とその前年の33,510匹から半減した。今回調査ではムサシトミヨ保護区とされる最上流域の400mの区間で前年より生息数の増加傾向が見られ、関係者から安堵の声が聞かれた。県環境科学国際センターの金澤光さんは「保護区で生息数が増えた理由はムサシトミヨをまもる会などが中心となって水草の管理ができたおかげ」とコメント。

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内 容
2月 9日 (水)	埼玉新聞	荒川の再生考えよう 日高で13日シンポ	河川の水質や動植物が生息する環境など荒川流域の再生をテーマにしたシンポジウム「地域と河川生態系再生の道筋を探るー市民による「公」とは？生きもの”都会”人の都合ー」が13日日高市生涯学習センターで開催。アユの遡上調査など荒川流域の再生活動に取り組んでいるNPO法人荒川流域ネットワークが企画。当日は県環境科学国際センター自然環境担当の金澤光さんが同ネットなどのプロジェクトチームが取り組んでいる本年度のアユ遡上調査結果を報告する。
2月23日 (水)	産経新聞	相次ぐ野鳥中毒死 故意か過失か 「メソミル」検出 農薬野菜食べた可能性 も	県内各地で1月末から、農薬に含まれる成分「メソミル」によって中毒死した野鳥の死骸が相次いで見つかった。県環境科学国際センターで死因を調べたところ、胃から殺虫成分メソミルが検出された。

(2)テレビ放映、ラジオ放送

放送日	局名	番組名(タイトル)	内 容
4月20日(火)	FM NACK5	「モーニングスクウェア」	県環境科学国際センター展示館がリニューアルオープンしたお知らせ
4月30日(金)	FM NACK5	「モーニングスクウェア」	GWお出かけ情報で県環境科学国際センターのイベントのお知らせ
7月15日(木)	FM NACK5	「モーニングスクウェア」	8月28日から開催される「彩の国環境大学」の開講式、公開講座のお知らせ
8月23日(月) ～ 8月29日(日)	JCM関東 ケーブルテレビ	「まちネタ」	街のニュースやイベントなど身近な情報を提供する番組である「まちネタ」で県環境科学国際センターの展示館及び生態園を紹介され、期間中繰り返し放送された。
11月13日(土)	テレビ埼玉	「週刊彩の国ニュース」	11月14日県民の日に行われるイベントのお知らせ
2月10日(木)	FM NACK5	「モーニングスクウェア」	2月17日に行われる「事業所環境セミナー」のお知らせ